

日本・韓国・中国における「ウチ」と「ソト」

大崎 正 瑠

A Comparative Study of “in-group” and “out-group” among Japan, Korea and China

OSAKI Masaru

Abstract

In most studies, it is sometimes said that theory without practice is dangerous while practice without theory is vain. The author believes that studies on Japan-Korea intercultural communication or Japan-China intercultural communication are still in the process of staying or living in the actual places and observing the local people for a period before establishing theories. This paper discusses comparison of “in-group” and “out-group” among Japan, Korea and China with assistance of dictionaries, questionnaires, hearings and the local living experiences of the author. The meanings of “in-group” and “out-group” vary from culture to culture. The communicators may change more or less the communication style to out-groups differently from the communication style to in-groups in each culture. Finally the author would like to point out that the meanings of “in-group” and “out-group” in Japan will be changing due to internationalization, urbanization, or change of communities etc.

1. はじめに

日本では、しばしば内集団の意味で「ウチ」、外集団の意味で「ソト」という言葉が使われる。手元の辞書には「内」「外」の定義はあるが、「ウチ」「ソト」の定義はない。何故カタカナで表記されるのか筆者には定かではないが、とりあえず漢字の「内」「外」の定義を見てみよう。「内」には、「身の回り、側近」（『広辞苑』）あるいは「自分の家庭」「自分の所属している、会社・役所・学校などの団体や機関」（『大辞林』）などの定義があり、「外」には、「自分の属する側または身近なものを「内」というのに対し、その反対のもの」（『広辞

日本・韓国・中国における「ウチ」と「ソト」

苑』あるいは「その人の所属する家庭・学校・会社などでない所」（『大辞林』）などがある。これらは、ある範囲や集団・組織を境界とした内側と外側を表しているように思う。筆者は、「ウチ」「ソト」には、自分が内側に属しているのか外側に属しているのか、という心理的な状態を表すことが大きいと考える。

文化により、「ウチ」の人と「ソト」の人に対するコミュニケーション方法は同じではない。日本、韓国、そして中国もその例外ではない。ただしその度合いに差がある。もちろん個人差もあるにはある。コミュニケーションを考える場合、どんな人が「ウチ」で、どんな人が「ソト」なのかを知っておくことは重要なことである。

日本の「ウチ」「ソト」の問題は、韓国の「ウリ」「ナム」、中国の「一家人／自己人」「熟人」「外人」の問題であると言ってもよいだろう。日本の「ウチ」に相当するのは韓国の「ウリ」、中国の「一家人／自己人」である。日本の「ソト」に相当するのは韓国の「ナム」、中国の「外人」である。中国の「熟人」は、「ウチ」と「ソト」の間ぐらいかと思われる。本稿の中では日本については先行研究、韓国と中国については辞書の定義やアンケート・ヒアリングの結果を交え、日本、韓国、中国の「ウチ」と「ソト」について吟味してみる。

2. 日本のウチとソト

さて日本での「ウチ」と「ソト」の問題については、これまで様々な研究者から報告がなされている。たとえば中根千枝（1972）の「ウチ」と「ヨソ」、米山俊直（1976）の「身内」「仲間」「世間」「同胞」、岩田龍子（1980）の「気のおけない関係」「馴染みの関係」「無縁の関係」、Midooka（1990）の「気のおけない関係」「仲間／味方」「馴染みの他人」「無縁の関係」などがある。これらを参考にしながら、筆者が考える現代の社会構造を示してみる。

(1) 先行研究

・中根千枝の「ウチ」「ヨソ」

中根千枝（1972）では、「ウチ」は、学歴・地位・職業・資本家・労働者・性別・年齢などの「資格」ではなく、一定の所属機関・地域のような自分が所属する「場」に基づく集団であると説明されている。このような集団は、「親分・子分」「先輩・後輩」のようなタテの序列によって繋がっており、人間関係は接触の長さ・濃密度により強弱が決まる。「ウチ」の中では、序列を覆すような議論はなされず、成員は親分や先輩に対して自分の意見を充分に披瀝することはない。厳しい上下の序列は、能力差を認めない能力平等観に由来すると説明される。「ウチ」の意識が高まると「ヨソ者」に対して排他的になり、人間扱いしなくなる。否自分たちの世界以外の者に対して敵意に似た冷たささえもつようになる。「ウチの者」意識により、成員は「ヨソ者」に対して非社会的になり、日本語の「田舎っぺ」にあたる狭い枠に嵌まってしまう。ひいては国際性を持ち得ないというものである。中根説に対しては、

種々の批判もある。たとえばタテ社会論は、大企業・官庁や大学等のエリート集団にあてはまるが、庶民の集団にはあてはまらず、日本社会全体にあてはまるかどうかは問題である(米山俊直、1976、pp. 44-74)。また典型的タテの人間関係の上に立つ天皇制の問題を回避していることは致命的な欠陥である(南博、1994、p. 220)。

・米山俊直の「身内」「仲間」「同胞」「世間」

米山俊直(1976)では、上記のように中根千枝(1972)の「タテ社会」に疑問を抱いて、日本の社会の構図を関東や東北日本での「タテ社会」と関西や西南日本での「ヨコ社会」との地域差があると説明した。もちろん関東や東北日本にも「ヨコ社会」はあるし、関西や西南日本でも「タテ社会」はあるが、前者では同族的な血縁一族制度が発達した「タテ社会」が中心で、後者では座・株仲間・村組織・町組に見られるように「ヨコ社会」が中心であった。米山は、次のように日本の社会の構図を示した。

図1 社会の構図

世 間	同 胞
仲 間	身 内

出所：米山(1976)、p. 38

タテ軸右側が血縁的、左が非血縁的であり、ヨコ軸は、上が大きい集団・集合で非限定的、下が小集団で限定的である。「世間」は「世間体」などという場合の「世間」である。「同胞」というのは、血縁的な関係を観念的に拡大していった、イメージとしての人間の集合を指している。米山の「身内」「仲間」は、筆者の考える「ウチ」、「同胞」「世間」は筆者の考える「ソト」ではないかと思う。「世間」については、井上忠司(1977)が、日本人はソトの「世間」に準拠して自分の行動をコントロールし判断する 경우가多く、「世間」の動向にはとりわけ敏感で、ソトを知ることには非常に熱心である、と説明している。

・岩田龍子の「気のおけない関係」「なじみの関係」「無縁の関係」

岩田龍子(1980)では、一番親しい関係を「気のおけない関係」とし、次に述べる「なじみの関係」から発展したものである。この関係になると、相互の好意は努力して維持する必要のないほど確かなものとなり、互いに相手の好意をあてにすることができる。その好意は、言葉や一時の誤解などによって傷つかない。互いに無理を言っても許される。私的に立ち入ったことを打ち明けることも許される。相手に対する期待は、道義的期待以上のものにまで高まるが、しかしこの期待を裏切った場合にも、悪意がなければ許される。このようなことが許される関係である。これより一歩前の関係は「なじみの関係」である。以下がこの関係を形成する要件とされる。接触の頻度と期間が充分であること。パーソナルな接触であること。できれば何らかの経験を共有すること。相互にクセや性質をある程度知ること。ある程

日本・韓国・中国における「ウチ」と「ソト」

度の安心感と好意が形成されること。「無縁の関係」では、社会の“鼻つまみ”でなく、善良な市民であっても粗野で冷たい態度を示す。要するに一般に日本人は、「なじみの関係」と「無縁の関係」では態度を極端に変える。ビジネスにおいては長期的取引関係を前提とする「なじみの関係」が重要であると主張する。

・御堂岡潔の「気のおけない関係」「仲間／味方」「なじみの他人の関係」「無縁の関係」

Midooka (1990) における4つの分類は、上記岩田龍子の3つの分類のバリエーションと考えられる。まず御堂岡は多くの学者が日本のコミュニケーション方法は「和」(keeping peaceful relationship with others) を最優先に考えていると指摘している。さて御堂岡の「気のおけない関係」(very intimate relationship) は、非常に親しい関係で、岩田と同じと考えられる。「なじみの他人の関係」(familiar relationship but not that of fellows nor allies) は、上下関係や「恩」「義理」をあまり考えずに接することができる関係である。この関係においては「ホンネ」と「タテマエ」のうち「タテマエ」が優先される。実際には「根回し」とか「二次会」において両者のギャップが調整されることがある。「仲間／味方」(relationship of fellows, or allies) は、「なじみの他人の関係」より親しいが、上下関係や「恩」「義理」が伴う。「無縁の関係」(no relationship) は、上下関係、「恩」「義理」、敬語など日本特有なコミュニケーション方法が取られない。しかし「気のおけない関係」においてもこのような気を使う必要がない。

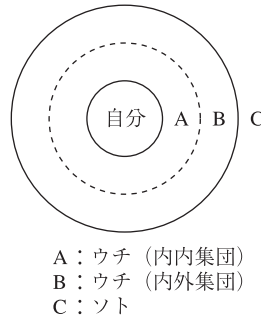
(2) 現代日本の「ウチ」「ソト」再考

筆者は、「ウチ」として二重構造を考えたい。まず「内内集団」ともいべき「家族」「親友・親しい仲間」である。親密性が高く、面子を共有する。普段はお互いに助け合う。メンバーが誉められれば自分も嬉しい。メンバーが非難を受ければ自分も非難された気がするし、そのメンバーの弁護にあたる。お互いに遠慮は不要で言いたいことを言える。一種の「甘えの構造」の関係にある。

次は「ウチ」に位置するが、「内内集団」の外にある「内外集団」ともいべきものである。自分の「所属集団」で、特に親密性が高くない。たとえば会社とか学校やクラスがそれに当たる。必ずしも面子を共有せず、また必ずしも言いたいことが充分言える訳でもない。ただし遠慮が要るが甘えたい。「地域」に根ざす仲間もこの「内外集団」に入れることができなくはないが、どうであろうか。国際化・都市化・少子化などが進み、地域の意味が希薄になってきており、「地域」は次第に「ウチ」から「ソト」へ追いやられていると考えられる。少なくとも「向こう三軒両隣」という戦前のような濃密な地域社会はなくなった。日本における地域社会の消滅は、人間を監視する社会の目が消えることになり、礼儀作法の退化・犯罪の増加を促すことになると、筆者は危惧している。

「ソト」とは、「見知らぬ人」「他人」「余所者」である。遠慮が要らず、多くの場合言いたいことが言える。特に助け合わない。しばしば冷たく、無礼な態度を取る。日本の「ソト」

図2 現代日本の「ウチ」と「ソト」



は、日本でよく「他人の關係」を「水くさい」と言うように「水」のような冷たさであろう。米山（1976）は、「ソト」を二重構造として捉え、「世間」と「同胞」に分けた（pp. 37-41）。しかし筆者は、「ソト」を二重構造としては捉えない。「世間」は、かつて地域的な結び付きが現在より強かった時代には想定できるが、次第に「世間」の意識は遠のいている。現在では恐らく「世間」と「同胞」も区別ができにくいのではないのかと考える。筆者は、これら一つに纏めて「見知らぬ人」「他人」「余所者」の集合体としての「ソト」と捉える。したがって全体としては三重構造となる。

日本においては、これまで「ウチ」のメンバーは、「ウチ」と「ソト」との間に高い壁を設けてきた。しかし日本人の場合は、「親しき仲にも礼儀あり」で、相手の心の中にまで立ち入るようなことはあまりしない。韓国人や中国人から見れば、日本人の親しきは薄情に映るだろう。筆者の体験では、韓国の「ウリ」や中国の「一家人」「自己人」は、日本人より遥かに情の濃い付き合い方をする¹⁾。

次に「ソト」すなわち「見知らぬ人」「他人」「余所者」を吟味してみたい。日本の「国際化」「都市化」「地域社会の変化」などのため「ソト」の意味合いが徐々に変化してきているし、今後も変化する可能性がある。

遠山淳（2001）は、アメリカの異文化コミュニケーション研究者グディカンストの不安・不確実性調整理論（Anxiety/Uncertainty Management Theory）に触れながら、日本語には英語の“stranger”に相当する語がないという（p. 119）。グディカンスト（1993）の言う“stranger”とは、異文化の人々や未知の人々（文化・民族・性・年齢・宗教・身体的障害・性的志向などの違いをもつ人々）を指す（pp. 72-100）。筆者もこれまで日本語には、その意味がなかったことに同感である。遠山によれば、違和感（strangeness）の度合いは、「知らない人」「変な人（奴）」「外人」「異人」と上昇する。単なる「知らない人」と「異人」とでは雲泥の差であり、相違性の温度差が非常に大きい。遠山自身は今まで見知らぬ日本人のことを「外人」とか「異人」と思ったり、使ったりすることは一度もないと言う。この点についても筆者は同感である。基本的には、日本人は今まで短期的にはあったが長期的には異

民族に侵略されたり、支配されたことがなく、「見知らぬ人」にはあまり警戒してこなかった。日本人にとって「見知らぬ人」「他人」「余所者」は、文字通り単に面識が無い程度のことであった。いわば隣人の延長、あるいは親戚の延長のイメージである。これまでは少なくともそうであったが、しかしこれからはどうなるか分からない。日本人にとって面識が無い人「見知らぬ人」でも、相手が「善い人」と信じれば相手に協力するし約束も守ってきた。だから「見知らぬ人」「他人」「余所者」でも、よほど変な人でなければ相手をそれほど疑うこともせず信じてきた。日本においては「性善説」が普及してきた。

日本人は鎖国なども経験してきて、近年まで日本については現在のように外国人と日常的に接する本格的な異文化コミュニケーションは、無いも同然であった。仮にあったとしても、同一文化内のコミュニケーション (intra-cultural communication) すなわち概ね同人種・同文化・同民族・同言語・同宗教における下位文化間 (between/among subcultures) の異文化コミュニケーションであって、異人種・異文化・異民族・異言語・異宗教間の異文化コミュニケーション (intercultural communication) ではなかった。上記米山俊直の「世間」や「同胞」もグディカンストの“stranger”ではない。しかし今や日本も国際化の波が押し寄せ、異観・異形・異文化・異民族・異言語・異宗教・渡来の人に接することが徐々に増加している。“stranger”に対しては、「不安 (anxiety)」と「不確実性 (uncertainty)」が高まる。日本でもこれから少しずつ「見知らぬ人」「他人」「余所者」の見方が変化してくるものと思われる。

3. 韓国のウリとナム

韓国の「ウチ」と「ソト」は、「ウリ」と「ナム」である。

(1) ウリ

〔辞書的定義〕

・ウリ：「我」「我々」「うち」(安田・孫、1989)

「私たち」「われわれ」「われら」「私」「自分」「うち」(大阪外語大学、1985)

以下は、2005年夏に在韓国日系企業8社で行った韓国人によるアンケートである²⁾。

〔アンケートの回答〕(質問と回答の原文は、韓国語。回答は重複する内容を整理した。)

質問：ウリとはどんな人達か。ウリとはどんな付き合い方をするか？

- ・ 家族、会社の同僚、親戚、友達。
- ・ 自分を愛してくれる人々。
- ・ 一緒に同居してきた人たち、すなわち情を分け合った人たち。
- ・ 親密で、率直な関係にある人。頼みごとができる人。
- ・ No と言えない関係にある人。せいぜい Yes, but … と言ったことができる関係にある人。

- ・自分が所属している集団、会社、学校の同期、家族。
- ・同じ考え、同じ意志をもっている人。
- ・お互いに助け合える関係にある人。
- ・利害を共にする集団。
- ・韓国人・外国人の区別なく、同じ目標、趣旨をもって集まった集団。
- ・血縁や地縁（同郷者）の関係は変わらないが、ある目的や目標のために生じたウリは常に変化する関係にあると思う。
- ・状況によって異なる。会社対会社の場合は、自分の会社。部署対部署の場合は、自分の所属する部署。部署内では自分の所属する課。
- ・会社のすべての職員。すなわち同じ目的をもって心を合わせて努力している社内の全ての職員。
- ・自分の会社、役職員。
- ・自分と同じ考え方をする人。自分が所属している組織の構成員。
- ・自分と関連している人、たとえば職場では会社全体。
- ・さまざまな意味をもつが、一般的に自分と利害関係が生じた人々。
- ・韓国の国民全体。

辞書的定義でも「ウリ」の最小単位は、「自分」であり、最大範囲は「韓国民全体」すなわち「韓民族」である。状況により変化するので、その意味で相対的と言える。

韓国では、上から下に命令が下される縦糸としての権力社会に対して、横糸としての血族的繋がりがあると考えた。韓国は、まずは血縁を中心とした集団社会である。李王朝初期の15世紀頃から徐々に確立した父系血縁社会とは、「ウリ」といわれる血族中心の集団である。「ウリ」は血縁の近い方から、家族、堂内（タンネ：四代祖血族）、門中（ムンチュン：分派祖血族）、宗族（チョンチン：同本同姓血族）があり、これが「第一次ウリ集団」である。ウリの基本概念は、飢餓のときに助け合う「共同会食」（commensality）である。今でも韓国では、食事の時に各自が「取り皿」を用意せず、同じ鍋や汁から共同で食物を取る習慣がある。どこでも集団で食事をするのが前提である。血縁は貧しかった時代の生活保障あるいは外部からの攻撃に対する防御の役割を果たしてきた。

韓国人が最初に人に会う時には、まず相手の姓名と本貫を聞く。相手が自分と血縁的にどれだけ近いかわかるためである。「本貫（ボングアン）」とは、その宗族の発祥の地を表す。姓名が同じ「金（キム）」でも、本貫が異なることがある。有名などころでは、安東金（アンドンキム）、金海金（キメキム）、義城金（ウィルソンキム）、慶州金（キョンジュキム）などがある。その他には密陽朴（ミリアンパク）、慶州李（キョンジュイ）などがある。要するに韓国人は、同姓同本の宗族を巨大な血縁集団と考える。韓国には、同姓同本不結婚の原則がある。男女が知合いになると、同姓同本か否かにより、相手が親戚か恋人かが決まる。

日本・韓国・中国における「ウチ」と「ソト」

相手が親戚と分かり自分の思いが成就できない時には悲劇が起こることもある。1997年これは違憲の判決が出され緩和されたが、社会慣習は急には変化しない。

「門中」というのは、日本でいえば豊臣秀吉とか徳川家康とかその宗族の「中興の祖」ともいべき人を分派の祖とする血縁集団である。宗族全体の中の分家である。また「堂内」というのは、高祖（四代祖）を同じくする血縁をいう。通常韓国における、法事はこの堂内単位で行われる。

血縁の外にあるのが、地縁・学縁である。地縁は狭い意味では同じ村とか同じ町の出身すなわち同郷者で相手の家族などを知っていればより親密になれる。しかし地縁は血縁のようにはっきりしていない場合もあり相対的である。たとえば慶尚道と全羅道との対立がある場合、慶尚道の住民・出身者同士が「ウリ」となり、また同様に全羅道の住民・出身者同士が「ウリ」になることはある。相対的というのはこのような意味である。ソウル、釜山、仁川のような人の出入りが激しい都会では地方と同じような地縁感覚は乏しいかも知れない。たとえばソウルを中心にしたアンケートの中には、「ウリ」に町内会を含めるといような回答がなかった。ただし都市対抗のような「ソウル」対「釜山」、「ソウル」対「仁川」のような状況になることはあるかも知れない。

歴代の大統領、最近では盧泰愚元大統領、金泳三元大統領、盧武鉉現大統領は共に慶尚道出身であり、今まで金大中前大統領だけは全羅道出身であるが、大統領選ともなると、主義主張ではなく、慶尚道対全羅道のように同郷愛に基づく地域対地域の対決になってしまう。その結果地域差別も生じた。新大統領が誕生すると、主義主張が同じことが前提であるが、内閣中枢や側近には多くの血縁・同郷・同学を配して足下を固める。

学縁には、高校の同窓と大学の同窓がある。高校の同窓は地縁とも重なり、一般には結びつきが強い。高校の同級生は、青春時代お互いに親しく付き合い、あるいは競い合った仲であり、親密感が強い。また同じ高校の先輩の言うことは絶対である、という韓国人は多い。ソウルの名門高校として京畿高校や景福高校、慶尚南道の慶南高校など高校の学閥が存在する。同様に大学の学閥もある。ソウル大学、延世大学、高麗大学、釜山大学などの名門大学などの学閥である。しかし必ずしも高校の同窓より深い関係とは言いがたい。韓国の大学進学率は中学からは約70%、高校からは約90%³⁾、大学の意味合いも変化してきている。今後はどうなるであろうか。

その他の「ウリ」としては、男であれば軍隊時代を共に過ごした仲間、現在の会社の同僚、趣味仲間、若い世代では電子メールでコミュニケーションをする仲間（メル友）という友人・知人も含める。

「ウリ」は、相対的である。アンケートにもあるように、固定したものではなく、状況により伸縮し、その構成が変化する。まず「ウリ」は、平和で安定期には、自分、家族、血縁、同郷、同窓、知人、民族と広がる。反対に混乱期にはこの逆の順序で縮む。

たとえば、かつて板門店で北朝鮮代表と韓国代表が厳しい交渉の時に、北朝鮮代表が「ソウルは火の海になるぞ！」と脅しをかけても、交渉が終わって乾杯の時には、彼らも恬然と酒を注いでくれ、にっこり笑うという。会食のときはウリ感覚となる。したがって一般に会食の時に厳しい交渉やビジネスの話を行うのを嫌がる。交渉の時は「理」の世界、会食の時は「気」の世界ということが言える⁴⁾。

現在の韓国は1988年のソウル・オリンピック開催や2002年のワールド・カップ共催を経験し、今や一人あたりの国民所得も12,000ドルを超え⁵⁾、生活水準が向上し、先進国の仲間入り目前と見られる。筆者の印象としても、1975年頃と比べてもちろん、1995年頃と比べても人々に余裕の表情が見られる。たとえば地下鉄などでも乗客は、昔見た光景とは異なり、降りる人を待って乗り込む傾向にある。横断歩道の前でも車は歩行者をじっと待っている。以前の状況を知る筆者にはいずれも驚きである。

このような状況から判断しても現在の韓国人は趣味仲間や友人・知人という人達を「ウリ」に入れる傾向が強いように思う。すなわち宗族や血縁などを強く意識しているとは思われない。現在の関係を意識する傾向があるように思われる。

「ウリ」の一番外側にある知人は、過去の事実に基づいて関係が固定されている血縁・地縁・学縁とは異なる。すなわち現在の利害関係から成立している知人との関係は流動的であり不安定である。日本人にはその感覚はなく理解ができないのだが、韓国人は見も知らぬ人同士の間には深い溝があると考えられる。その関係をウリ内に留めようとする場合には、溝を埋めるためにそれなりに情を注ぎ込まなくてはならない(古田、1995、p. 25)。たとえば、お互いに会食・贈り物・頼み事・プマシ⁶⁾あるいは迷惑を掛け合うなどである。そうしないと関係が薄れて、知人は次第に「ウリ」から「ナム」の関係に戻ってしまう。その意味で「ウリ」としての知人も流動的である。筆者は、若者が学校の先輩・後輩、先生、友人と日本人には不思議と思えるほど、親密に付き合うのはこのような背景があると考えられる。たとえば、女子大生が寮に入ると、同室の後輩は先輩をオンニ(姉)、先輩は後輩をトンセン(妹)と呼び、仲のいい姉妹のように助け合う。男子学生の場合も、後輩は先輩をヒョン(兄)、先輩は後輩をトンセン(弟)と呼ぶ。下着・歯ブラシや冷蔵庫の食べ物もどちらの所有物か区別がつかなくなる。女性同士はよく手をつないで歩く。男性も日本人よりは接触する傾向にある。

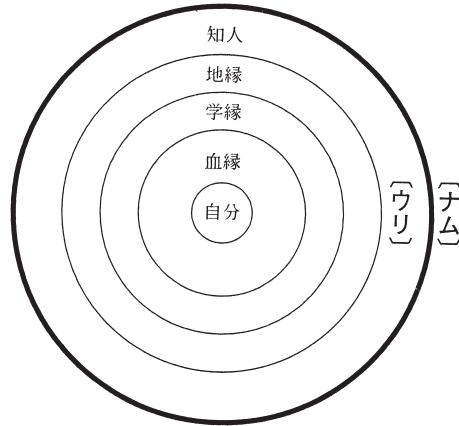
「ウリ」にある人には、儒教文化が支配し敬語を使うべき時は敬語を使い、礼を尽くすべき時は礼を尽くす。親密になればなるほど本音で話す。親しい友人同士では甘えあう。迷惑をかけることができる間柄が本当の親友である。韓国の「甘えの構造」である。

(2) ナム

〔辞書的定義〕

・ナム：「自分以外の人」「人様」「他人」(安田・孫、1989)

図3 韓国の「ウリ」と「ナム」



(注) ウリの範囲は状況により伸縮する。

「他人」「人」「我以外のすべて」「非我」(大阪外語大学、1985)

[アンケートの回答] (質問と回答の原文は、韓国語。回答は重複する内容を整理した。)

質問：ナムとはどんな人達か。ナムにはどんな対応をするか？

- ・自分と自分の家族以外の人たち。他の会社の人たち。知らない人たち。
- ・家族、友人以外の人たち。第三者。
- ・気をつけなければいけない人。
- ・今まで縁がなかった人たち。
- ・自分と利害が異なる人。
- ・自分と繋がりが無い人。被害も受けないし、助けも求めない。
- ・自分の会社では他の会社の人たち。自分の家族では他の家族。韓国人としては他の国家の人たち。
- ・自分を踏み台にして成功しようとする人。
- ・個人的に親しみがない人。理解と心配りが無い。
- ・自分以外のすべての人 (家族を含む)。自分とは年齢、職位などにより違う行動をしている人。それらの人に対して自分との損得を計算しながら行動する。
- ・行動や考えが異なる人。自分にはそれほど影響がない人々。無関心。
- ・自分にはまったく関連のない人。「ナム」には関心がないから彼らが何をしようと気にならない。
- ・ウソをよくつく人。そのような人には形式的に接する。
- ・外国人、または自分の所属している集団以外の人。
- ・自分が所属していない集団。疎かである。排他的になる場合もある。
- ・行動としては、礼儀正しく、丁寧で、建て前で行う。冷たい行動。相手を理解するため

の努力（話を聴取し相手の立場から考える）と自分の考えを理解させるための努力（議論、コミュニケーション）が必要。

- ・「私」と「あなた」または「ウリ」ではない第三者。したがって「ウリ」に属していた人が「ナム」になることもある。
- ・「ナム」は、相手と利害関係が生じ敵対関係になると対決するしかないが、そうでない場合は、「ナム」はあくまで「ナム」なので、気にしない。
- ・自分と利害関係がない人たち。普段別に意識していない。「ナム」がどんな考えをし、何をするか自分には大事ではない。
- ・他社。しかし他社だからといって無視するのではなく、ライバル関係にある会社、同じ業界にある会社として見る。
- ・これには色々な意味があると思うが、そんなに遠い所の存在とは思わない。あるきっかけによって親しくなれる存在だと思う。
- ・「ナム」は自分と利害関係が成立していない人々。しかしこのような「ナム」もこれから将来に自分と新しい関係を形成する可能性もあるので、オープンマインドで接するよう努力している。
- ・「ウリ」以外のすべての人達。しかし「ナム」がいないと「ウリ」もいないと思っている。たとえばビジネスの顧客、競争業者、協力企業など。「ナム」を「ウリ」の中に包容できるよう努力すべきだと思う。

韓国人は「ウリ」という言葉はよく使うが、「ナム」という言葉は特に頻繁には使わない。その意味で必ずしも「ウリ」の正反対の言葉ではないかもしれない。「ナム」とは「無関係な人」「赤の他人」で、彼らがどうなろうと関心がない。韓国においても、事実有史以来2年に1度の割合で戦乱があった⁷⁾。中国ほどでないにしても、「ナム」も簡単には信頼が持てる相手ではないだろう。韓国人は、「ナム」に対しては、一般に排他的、無礼、冷淡で道徳がない。そして彼らを信じない。韓国は中国以上の儒教の国と言われるが、儒教は「私徳」を説いているものの「公德」を説いていない。実際にコミュニケーションをすることになれば、建て前でそれなりにそっけなく応じる。年齢秩序を示すことはある。ただし相手の発する言動には特に関心がない。

客観的に見て、ウリ同士は熱く感じるが、ナム同士は相当冷たい。日本の「見知らぬ人」に対する以上の冷たさを感じる。筆者の限られた範囲の経験ではあるが、たとえばビルのエレベーター内で遠くにいて目的階のボタンを押したい時、なかなかボタンの近くの見知らぬ人に言えなく、無理矢理でも近づいて自分で押さなければならず、逆にボタンの近くの方は見知らぬ人にも何階ですか？ と聞きもしない。あるいは結婚式の同じテーブルの席に着いているのに、自分の写真を撮ってもらいたい時、隣の見知らぬ人にカメラのシャッターを押してくれませんか？ と依頼しにくい雰囲気であり、周囲の人も今まさに自分の写真を撮り

たがっている人にシャッター押してあげましょうか？　と言おうともしない。このようなことを経験すると、韓国では見知らぬ人同士の間にはやはり深い溝があるのか、と感じるようになる。筆者は、日本ではこのような冷たさを感じたことがない。韓国でも長距離列車とか酒場で偶然隣に座った、見知らぬ人と知合いになり話が弾むようなことはまずないと言える(李、1995、p.77)。

韓国の「ナム」同士にも「氷」が存在すると筆者は考える。そしてこの「氷」を溶かすためには、「情」の注入が必要である(古田、1995、pp.130-134)。筆者の直観の域を出ないが、韓国人は「ナム」に対して、下記中国の「外人」ほど警戒しているように見えない。親しくなるのに中国の「外人」の場合より時間がかからないように見える。したがって筆者は、単なる固い「氷」ではなく、「氷水」状態を想定したい。

筆者は、「ナム」の中には「敵対する人たち」が含まれると考えている。その典型として宗族同士が争う場合がある。たとえば李王朝末期の権力争いをした安東金一族と豊壤趙一族のように一門の命運を賭けて宗族同士が争う場合は、お互いナムになる。また姻戚同士でも「ナム」になることがある⁸⁾。歴史的にみると朝鮮半島では、国が一つにまとまり外敵から護らなければならない肝心な時に、自分の家門の名誉を護るため、宗族同士が政敵すなわちナム同士となり、内紛を起こし、国を護れないことが実に多い。

4. 中国の一家人／自己人、熟人、外人

中国での「ウチ」と「ソト」は、「一家人／自己人」と「外人」である。その中間としての「熟人」については明確に区分するのが難しい。「熟人」の中には中国人の関係網(クワンシーワン)すなわちネット・ワーク上に入ることもあるので、「ウチ」に入れることもあるし、警戒感が抜けないとすれば「ソト」に入れることもできる。

アンケートは、筆者が2002年夏に行った在北京および在上海の日系企業12社で行った中国人によるアンケートである⁹⁾。ただしこれは「一家人／自己人」と「熟人」のみについてであった。「外人」については、北京滞在中に何回か中国人にヒアリングを行ったものである。

中国は、日本とは人間関係の環境が非常に異なり、歴史的背景を知らないとよく理解できないので、熾烈な生存競争を中心に最初に記述しておく。

一部の日本人には、自然を優雅に美しく謳う李白・杜甫・陶淵明・王維・孟浩然・白楽天などの漢詩の影響もあるのか、中国は山紫水明のイメージがあるが、決してそうではない。中国人の挨拶には、天気や季節を表す表現がないということだが、自然がそれだけ厳しいということだろう。中国において列車で旅に出ると黄土が一面に広がる。中国の多くは砂漠地帯・山岳地帯であり、数年毎に大洪水そうでなければ大旱魃が、そしてこれに伴う大蝗災(いなごの災害)が起こる。「南洪北旱」と言われ、おおむね北方地方で日旱が、南方地方で

洪水が起きる。中国の山河は荒廃している。年により数百万の人々が餓死してきたと言われる。現在でも中国は森林伐採に伴う森林面積減少・砂漠化など自然環境の加速度的な崩壊を抑えることができない。中国の砂漠は国土全体の27%に達していると言われる。中国の自然は、山地33%、高原26%、盆地19%、丘陵10%、平原12%である(野村、1991、p.21)。耕地面積は約10%であるが減少の一途を辿っている。現在人工衛星で確認できる実際の耕地面積は8%とされる。中国の耕地面積は地球全体では7%に対して、人口は世界総人口の22%である。これを養うことは大変である。

中国人は血縁でないと信用できないので、余裕ができるとできるだけ子孫を増やそうとする。人口増加は中国の永遠のテーマであり、これまで自然災害に加えて、およそ300年毎の易姓革命(王朝交替)により大量殺戮が行われ自然な人口調整が行われてきた(連、1991、p.115)。現在は革命が起きにくい状況となった。「一人っ子政策」は人工的な調整方法である。また自然破壊とともに公害が進んでおり黄砂や酸性雨が日本にもやってくる。このような苛酷な自然・社会状況に対して生まれた哲学が、「没法子!」「没有法子!」(仕方ないさ)である。ともかく諦めて成り行きに任せる。しかし完全に諦めたのではなく、いつの日かなんとかしたいと思い、その場は耐えるのである。このような状況から自然に生まれたのが中国人の何事に対しての「無感動」である(和辻、1979、p.151)。中国人には大陸的な鷹揚さがあると言われるが、これは利害関係のないものに対する徹底した「無関心さ」の一面でしかない。

さて中国人は好戦的と言ってよいだろう。「夏」王朝・「殷」王朝以後近代に至るまで中国は何千年にも亘り戦乱に明け暮れた。秦の始皇帝が即位した紀元前221年から1920年までの2140年間で160回の国家的内乱があり、それに費やされた年数は896年、すなわち3年に1回以上の期間が戦争に費やされた(黄、1994、p.28)。近代に至るまで中国ではどこかで毎年のように戦争があり、それは日本のように1日とか数日で終わり農民が手弁当で見物に出掛けたというような生易しいものではない。中国の戦乱の歴史に対して日本は無戦乱の歴史である。中国の戦乱は長期戦であり、その度に兵士や農民が巻き添えにされたのである。

(1) 一家人／自己人

「一家人」の辞書的定義は、「一家族の人」「仲間」「味方」である(愛知大学、1987;大東文化大学、1994)。「自己人」の辞書的定義は、「仲間」「味方」「自分側の人」である(同上)。

[アンケート内容](質問と回答の原文は、中国語。回答は重複する内容を整理した。)

質問:「一家人／自己人」とはどんな人か? またどんな付き合い方をするか?

- ・厳密に言えば「一家人」と「自己人」は、区別されるべき。「一家人」は関係がより近い。狭義で「一家人」は家族の一員で、ビジネスで近い関係にある人も「一家人」とも言える。たとえば一つの親会社の下にある二つの子会社は「一家人」と言える。「一家人」と付き合いときは、友好的な態度で楽しい気持ちで皆と付き合いという原則が必要であ

る。敢えて「一家人」のミスも我慢できる。「一家人」に困難があれば力を尽くして助ける。

- ・「一家人／自己人」とは、融和の関係をもち親しい人。電話や電子メールでよく連絡をとっている。
- ・「一家人」とは、お互いの人柄や性格をよく知っていて、心と心の交流ができる人。喜怒哀楽を分かち合う人である。お互いに平等に相手を扱う。
- ・「一家人」とは、榮譽と恥辱を共有する人。誠意をもち、胸を開いて付き合う人である。
- ・「一家人」とは、一番自分と親しい関係の人である。生活でも仕事でもお互いに世話をし、交流する。「一家人」に対して怒るわけがない。自分はあるべく沢山のことをして、家族の面倒をみる。
- ・「一家人」とは、家族の一員である。母、父、兄、姉、妹、親戚や仲間たちで、彼らと付き合うのは楽しく、ストレスもない。何かがあったらお互いに相談し、祝日には皆集まって談笑する。
- ・「一家人／自己人」とは、考えていることが一緒の人。良いことをする時も悪いことをする時も一緒の人。「一家人」には家族（両親＋兄弟姉妹）の意味と一致団結して仕事をする時の会社のスローガンとして使用する場合の意味とがある。「自己人」は親友とほぼ同じ。前の会社の同僚やかつての高校や大学のクラスメイトで気の合う人。
- ・「一家人」とは、お互いに親しい関係にある人である。コミュニケーションに障壁がない。何でも話せる。「一家人」は、仲間としては問題ないが、仕事のパートナーにならない方がいい。「一家人」と仕事やビジネスのパートナーとは分けるべき。「一家人」に任せるから成功する企業も長く続かない。事業を長く続けるためには優秀な人材を常に沢山保有しておくべき。「一家人」に任せるのはいけない。
- ・「一家人」とは、二つの意味がある。一つは家族内の団結であり、もう一つは会社内部の団結である。一つ屋根の下で、会社の最大の利潤を追求する同僚とうまく付き合うのは正しい。
- ・「自己人」は、範囲が広い。「自己人」は、意気投合し、仕事でも気の合う、暗黙の了解ができる人。長く付き合えば「自己人」になれる。ビジネスで利益を共有するパートナーも「自己人」である。「自己人」と付き合う時は、「仁・義・誠・信」の原則に基づいている。この原則を相手にも要求する。そうすると相手は永遠に「自己人」になれる。
- ・「自己人」とは、一般的に志が同じで、意見も合う人である。彼等は同じ理想・目標・趣味を持っている。これは学歴・教育背景が異なるからといって自己人になれることを意味しない。私にとって、「自己人」は長年一緒に仕事をする人、あるいはあるきっかけで知り合いになった人である。お互いによく、個人のこと・家庭・仕事などについて障壁なく話し、助け合う。長年の友情を重ねているので、これらの人は「自己人」と

言える。

「一家人」と「自己人」は、解釈に若干の違いがあるが、ほぼ同義である。「一家人」は「自己人」より血縁の意味合いが強いようだ。「自己人」が、「一家人」と若干異なるのは、「一家人」より血縁の意味合いがやや薄く、集団として利害関係を共有するだけの場合がある。利害関係を共有する場合には、状況によりまた相手次第により誰が「自己人」かが変化する。

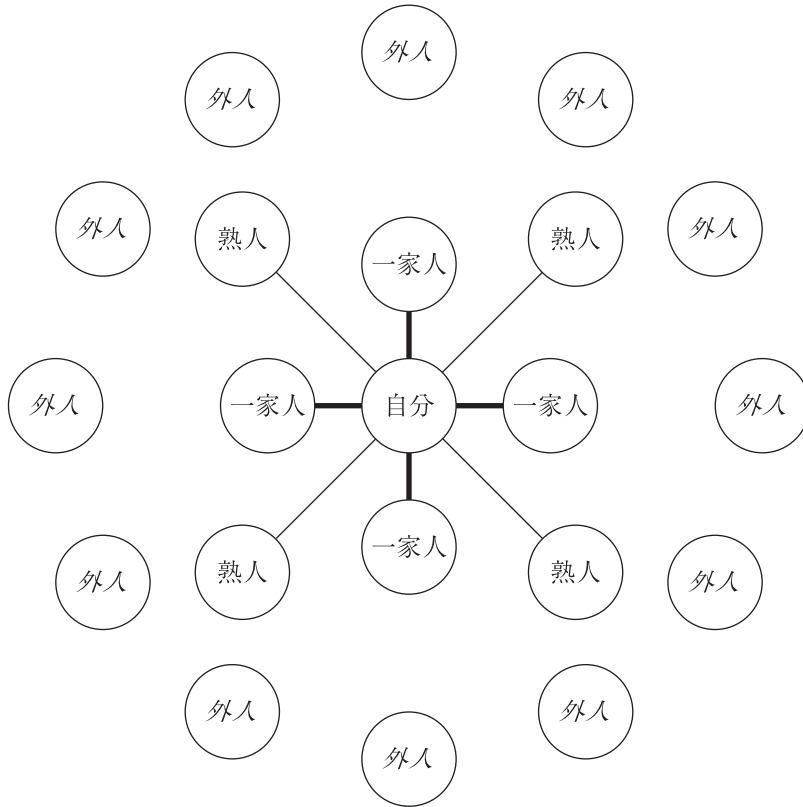
このように「一家人」と「自己人」は、解釈に若干の違いがあるが、ほぼ同義である。これに包含される人は、中国の厳しい人間関係にあって、唯一気の許せる人達で、基本的には家族・血縁・地縁・仲間・味方である。これらの人でも利害関係がある場合は、除かれる。利害関係があると血縁でもケンカ別れになることが多いからである。兄弟でも父親生存の間はいいが、父が死ぬとたがが外れてケンカを始める。「一家人」「自己人」は「面子」を共有し、仲間が誉められれば自分も嬉しく思い、仲間の悪口を言われると自分も怒る。

「仲間」は一般に「朋友」と言われる。「朋友」は友人であるが、日本語の友人よりもっと親密な感じである。次の場合で、かつ気が合って意気投合した友人をいう。①幼馴染み、②高校や大学のクラスメイト、③前の会社の同僚、④一緒に軍隊生活をした仲間、⑤ある年代では「下放」といって政府の命令で一緒に農村で仕事をした仲間、⑥その他。

その中でさらに親しい友人が「好朋友」または「老朋友」である。すなわち親友である。親友ともなると家族にも言えない悩みを相談することもあるから見方により一番親しいと言えるかもしれない。長期的な関係を望み、利害関係を持たないほうがうまくいく。利害関係を持つと、対立してしまえば関係がすぐ崩れるからである。

日本人の中には、中国人が「信用」を大切にしている人がいるが、「信用」の意味が異なる。中国人の「信用」とは、証文なしで金銭の貸借ができることを言うが、「一家人」「自己人」同士という特殊な人間関係に限られる。日本人が初めて会った人と2-3回一緒に酒を飲んだくらいで「信用」を大事にするというのは訳が違う。中国では、2-3回一緒に酒を飲んだくらいでは、まだ後述の「外人」である。自分が相手に対して約束を守るかどうか、また相手が着実に約束を守ってくれるかどうかは「朋友」またはそれ以上の親密さがないと駄目である。彼等はこのような信頼関係を築くのに10年かかると言っている。約束を守るかどうかの限界は「朋友」である。「熟人」か「朋友」の区別を見誤っていけない。貸借関係を気にしなくなるほどの真の「老朋友」になるには容易なことではない。ビジネスの場合でもこの「老朋友」関係にならないとうまくいかないとされる。逆に老朋友ほどの信頼関係が築かれるとこれほど強い味方はいない。日本のビジネスマンも中国人と「朋友」「老朋友」の関係になるにはどうしたらよいか研究すべきである。なお「老朋友」という呼びかけは、時には中国人にとっても恐怖の言葉となる。これは単に親しみを表すだけでなく、無理難題の頼み事をされることがあるからである。「老朋友」と言われて頼み事を断ると面子も信用も失う。

図4 中国人の人間関係モデル



厳しい社会を渡るため、中国人は会社や学校などのフォーマルな集団を超えて関係網（クワンシーワン）すなわちネット・ワークを作る。中国人は、決して会社人間になろうとしないし、会社の秘密もこの「一家人」「自己人」中心のネット・ワークを通じて容易に外に漏れる。経営者はこのようなことを知っておく必要がある。

身内関係では「欲求原則」が行われる（園田、2001、p. 163 および p. 188）。「欲求原則」とは、単純に“give and take”ではなく、相手の要求に応じてやることである。筆者の知る幾人かの中国人によると、一般に「一家人」「自己人」の仲間同士では、長期的には“give and take”の関係にあるものの、短期的にはそのようなことを特に求めないとのことである。

(2) 熟人

「熟人」の辞書的定義は、「知り合い」「なじみの客」である（愛知大学、1987；大東文化大学、1994）。

〔アンケートの回答〕（質問と回答の原文は、中国語。回答は重複する内容を整理した。）

質問：「熟人」とはどんな人か？ またどんな付き合い方をするか？

- ・「熟人」とは、お互いに知っている人である。相手の性格によって扱う。ある熟人とは、食事をしながら、本音で話し合うことができる。しかしある熟人とは、ただ挨拶するだ

けである。

- ・「熟人」とは、現在よく付き合う人または以前付き合ったことがある人。挨拶を交わす外には、困ったことがあれば意見を聞いてみたり、助けを求める。逆もある。割勘でお金を払ったり、おごり合ったりする。
- ・「熟人」とは、知り合いであるが、善い人間もいれば悪い人間もいる。自分にはその区別はできている。
- ・生活の中の「熟人」とは、友人とよい関係にあるかつてのクラスメイトである。仕事面での「熟人」とは、よく知っている取引先である。相手に困っていることがあれば自分の力を尽くして助ける。逆に自分に問題があれば「熟人」と相談する。
- ・中国では「熟人」がいれば何ごともうまくいく。ただし「熟人」は近付きすぎると駄目であるし、遠く離れすぎても駄目である。
- ・「熟人」とは、一度会ったことがある人でよくは知らない。こういう人と付き合うときは、警戒心を持たなければならない。もっとお互いに知り合わなければならない。
- ・「熟人」とは、友だちである。中国社会では知人がいれば少しの力で大きな成果を得ることができる。しかし詐欺師である可能性もあるのでよく注意した方がよい。社会で生きるためには知人や友人が必要であるが、全部これらの人に頼るのは遅れた考え方である。
- ・「熟人」とは、よく会ってある程度よく知っている人である。しかし心と心の交流ができることを意味しない。「熟人」に対しては、たいしたことでなければ手伝ってあげる。肝心な時は、自分の利益を第一に考える。こういう人と付き合うときは我慢が必要である。皆が一緒にいる時はなるべく楽しくする。
- ・「熟人」には、私にとって二種類ある。一つは一回だけ会った人。もう一つは、その人の性格・人柄をよく知っていて自分も付き合い方が分かる人。そういう人は信頼できる。長く付き合って、成功も失敗もして経験豊かな「熟人」とは、仕事でも協力できるし、一緒に事業も起こせる。
- ・「熟人」がいれば、どんなこともできる。各領域で一人の「熟人」がいれば、上から下までどんなことでも順調にうまく行ける。こうすると自分一人でも会社を起こせる。きっと儲かる。中国の言葉で「一人の熟人を増やせば、一つの道が開ける」。ただし不注意で権力を持っている人を怒らせてはいけない。「敵が一人増えれば壁も一つ増える」。これらは絶対に忘れてはいけない言葉である。
- ・「熟人」とは、会うと声をかけて挨拶する人で、たとえば隣人とか。こういう人と会っても友人のように見なさない。ただ挨拶だけで日常のたいしたことでもないことを話す。一定の距離を置いている。自分の本音を熟人に話せないのは当たり前のことで、すぐ泣きたい時でも熟人に会うと楽しく表現しなければならない。見破られないようにし

なければならない。

- ・「熟人」とは、よく会う人、何回も会った人をいう。両方とも一定の距離を置いていて深くコミュニケーションできない。両方とも相手の自分と違うところには関心がない。自分の考え方・悩みも相手に伝えない。同じ考え・意見・趣味があれば両方が話し合う。話題の範囲が狭い。「熟人」は付き合いにつれて、お互いに深く理解できるようになると「自己人」になれる。しかしあることをきっかけとして遠く離れて2度と会わなくなり相手を忘れるほどになる可能性もある。

中国人のネット・ワークの中に入るのは、基本的には「一家人」「自己人」中心であるが、「熟人」が入ることもあるだろう。

会社の同僚は、例外はあるだろうが、基本的にはせいぜい「熟人」同士の間柄が多いと考えられる。中国人にとって、会社は個人利益追求の道具に過ぎなく、自分を高く評価してくれる会社があれば容易に転職する。このようなこともあり、会社では横の連絡が悪く、自分の持っている技術・知識を同僚に教えたがらない。

義理関係にある熟人同士では、「社会的交換」すなわち「人情原則」が行われる（園田、2001、p. 182 および p 188）。義理関係とは、この厳しい世の中を渡っていくために、お互いに利用し利用される関係にあるとことを意味する。要するに“give and take”が行われる。しかし熟人同士でもお互いに油断ならないと考えている。すなわち熟人同士でも騙し合いがある。熟人が相手だと騙しやすいくという。熟人を騙すことを「殺熟」という。この場合の「殺」は「騙す」という意味である。だから熟人を「ウチ」に入れるべきか「ソト」に入れるべきか難しいところである。また熟人同士の場合の付き合いにも「面子」の問題が存在し、中国人にとっては自分の面子と相手の面子をどう立てるのか複雑で難しい¹⁰⁾。その対応の仕方を誤るとしばしば関係修復が難しくなる。熟人間では、感情的なわだかまりで人間関係が容易に破壊される。

日本に長期滞在経験のある汪洋（2002）よれば、身内関係においては、中国人のその範囲が日本人より広く、義理関係においては中国人のその範囲は遥かに狭い（p. 95）。彼のいう身内関係は「一家人」「自己人」、義理関係は「熟人」と考えられる。

(3) 外人

「外人」の辞書的定義は、「他人」「第三者」「見知らぬ人」「グループ外の人」「外国人」である（愛知大学、1987；大東文化大学、1994）。

〔ヒアリングの回答〕

これまでのヒアリングをまとめると、「外人」とは次のようなものである。

- ・「外人」とは、自分には関係ない人である。
- ・「外人」とは、どうなろうと自分には関心がない人である。
- ・「外人」とは、会ったことのない人である。

- ・「外人」とは、分からない言葉・方言を話す人である。
- ・「外人」とは、顔つきが異なる人である。
- ・「外人」とは、遠くから来ている人である。
- ・「外人」とは、慣習が異なる人である。
- ・「外人」には、視線を合わせないようにする。
- ・「外人」とは、簡単には口を利いてはいけない。
- ・「外人」には、礼儀を表さなくてよい。
- ・近寄って来る「外人」は、自分を騙しに来る人である。
- ・「外人」には、騙されないよう警戒をしなければならない。
- ・「外人」に話しかけられたらすぐ「不知道」（知らない）、「没有」（無い）と言うべし。
- ・「外人」が提示する値段は法外な値段である。買うときには値段交渉しなければならない。
- ・「外人」には、親切にしてはいけない。相手はつけあがってくる。
- ・「外人」には、自分の弱み・隙を見せてはいけない。悠長な態度ではいけない。
- ・「外人」の中で酔って自分を失ってはいけない。

中国では、有史以来「異文化」「異民族」「渡来人」がひしめき合い、戦い、殺し合い、支配・被支配、騙し合い、しのぎを削ってきた。事実数千年に亘り毎年のように戦乱が起り膨大な人間が殺されてきた。背景も素性も分からない「外人」は、当然信頼感が低く、警戒心が高まる。中国人の教育程度・品位・道徳心・人格などは、日本人以上にはるかに個人差が大きい。これは日本人の想像を絶する中国の超多様性、すなわち広大な国土による地域格差（言語を含む）、56ある民族格差（宗教を含む）、超所得格差、超学歴格差などに拠るところが大きい。もちろん中国でも善い人と悪い人がいる。だが中国人の善い人と悪い人の差は、日本人の場合よりずっと大きいと言われる。相手が善い人らしいと分かったとしても俄には信じられない。とにかく見知らぬ人またはよく知らない人には、いつも注意が必要だし、注意していれば間違いない。「外人」には用心するに越したことはない。そうでないと自分が食われる。中国では「性悪説」が一般的である。とても知らない相手を簡単に信ずることはできない。

赤の他人の関係すなわち外人同士の関係においては、「公平原則」が行われる（園田、2001、p. 171 および p. 188）。要するに特定の人をえこひいきしてはいけないのである。普段は全員に無関心あるいは無礼に振る舞う。そうしないとえこひいきされなかった他の人達が不満を持ちしばしば集団となり爆発し収束がつかなくなる。普段はまとまらない中国人が、不思議なことにこのような場合にまとまる。中国人の従業員が給料をすぐお互いに見せ合う理由は、自分たちが公平に扱われているかどうかを調べるためである。不公平・不公正なことに対しては断固抗議の声をあげる（田島、2001、p. 124）。

5. おわりに

日本、韓国、中国の「ウチ」と「ソト」についてそれぞれ吟味してきた。しかしそれぞれの「ウチ」と「ソト」の意味するところは少しずつ異なると考えられる。

日本の「ウチ」、韓国の「ウリ」、中国の「一家人／自己人」は類似している。ただし「情」の面での温度差がある。日本人は、親しくとも相手に対して迷惑を掛けまいよう若干の距離をおく傾向があるが、韓国人や中国人は、日本人より直接的で、もっと熱い付き合いをする。

また日本の「ソト」、韓国の「ナム」、中国の「外人」も類似している。それぞれ冷たい関係であるが、冷たさが異なる。日本人は「ソト」の人に対して、しばしば冷たく荒々しい態度を取るが、しかし相手がすぐ自分を騙しにかかってくるとは思っていない。異民族に長く支配されたことがなく、なお「見知らぬ人」に対して大らかだ。韓国は何度も異民族の侵略を経験しており、「見知らぬ人」に対して慎重だ。韓国の「ナム」は、お互いに溝があると考え、溝を埋めないことには相手を信じられない。したがって相手のことを考えず失礼な態度とる。中国は、長年に亘って異民族の侵略・支配、民主主義を経験してこなかった故の政府や役人に対する強い不信感などを背景に「人間相互不信」という社会病理がはびこり、「外人」に対して強烈的な警戒感がある。韓国も中国も儒教の国と言われるが、中国は庶民にまで浸透したとは言えず、また儒教は「私徳」は説いているが「公德」は説いていない。また筆者は、長年の観察から、韓国人も中国人も本質は自由奔放であり、儒教的でないから儒教が必要であったのではないかと感じている。筆者は、韓国の「ナム」は、日本の「ソト」と中国の「外人」との中間に位置するかと考えている。

また筆者は、「ソト」同士に関しての「溝」に、韓国人には「氷水」や中国人には「氷」を想定した。中国の「氷」は容易には溶けるものではない。「氷」は溶かさなければ親しくなれない。一般に日本人は、このような「溝」を考えたこともない。日本人同士なら、そのような「氷」を溶かす必要もなく友人関係になれるし、信頼関係を築くことができると考えてきた。

韓国人が親しくなろうとする時、何故わざわざ迷惑を掛けようとするのか、その理由が分からないと理解に苦しむ。日本では友人になるにはそのようなことをする必要がない旨韓国人に説明する必要がある。中国ではお客に対しても従業員が何故失礼な態度を取るのかその理由が分からないと理解に苦しむ。中国人と「朋友」になるためには、相当長い付き合いが必要であることを知らなければならない。

韓国人のコミュニケーション・スタイルには、日本人と共通する面があると同時に中国人と共通する面があると考えられる。たとえば日本人と共通するところは「水」、中国人と共通するところは「氷」と言えなくもない。この「氷」の部分を理解できないところで、

日本人は韓国人と共通性を感じつつ理解できないところである。

「ウチ」と「ソト」の意味は時代によっても変化してくるものであろうか。筆者にとって韓国や中国の変化について言及することは困難であるが、日本については多少可能である。日本の「ウチ」は、「少子化」「核家族化」「塾通い」「個室化」「地域社会の後退」などにより変化してきた。「ウチ」の範囲は、恐らく狭まってきており、また関係はますます熱いものではなくてきていると考えられる。日本の「ソト」は、これまで隣人の延長や親戚の延長くらいに考えられてきた。「見知らぬ人」「他人」「余所者」でも相手が「善い人」と判断すれば信じてきた。最近では「振り込め詐欺」のように日本人の「性善説」を逆しにとる現象も現れている。そうなると次第に見知らぬ相手を簡単には信じられなくなる。日本では、「都市化」「国際化」を背景として異観・異形・異文化・異民族・異言語・異宗教・渡来の人々と接する機会が増えるに従い、「ソト」に対し違和感 (strangeness) を感じる度合いが高くなるのだろう。日本の「ソト」の意味合いは徐々に変化しているのではないだろうか。

この研究を通じて、この種の研究の難しさと自分の能力の限界を感じた。特に中国に関しては、まず地域差、教育程度の超格差、所得の超格差、民族格差など誰を「中国人」とするか難しい。さらに筆者の韓国語と中国語が充分でない。韓国人と中国人はともに自分たちを省みることが好きでないとわれ、夥しい数の日本人による「日本人論」に対し、韓国人による「韓国人論」や中国人による「中国人論」がほとんどない。方法は、主として観察を重視する ethnomethodology (石井他、2001、p. 21) にならざるを得なかった。読者からは、もっと学術的にやれと叱られそうであるが、しかしあまり学術的にやると実体とは異なることがあるので難しいところである。

(後書)

本稿の査読者から示唆に富んだ貴重なコメントを幾つか頂いた。主として中国に関するものである。その中に (1)「日本の「ウチ」「ソト」の理論の延長で、韓国人と中国人を理解しようとすることでは限界があるのではないか?」、(2)「実際には、中国人の方が、自分と異なる存在とのつきあい方についての様々な対応のシステムを備えている。他人がいるのは当たり前で、同時にその他人との人間関係を構築することにも高いレベルのノウハウがある」、(3)「中国人での約束や契約に対する感覚の違いは、その方が合理的で臨機応変であるというメリットをどう感じるかの違いであって、この違いをどう理解するのが問題ではないのか? エスノセントリズムに陥らない上でも、なぜそうした行動や思考法の違いがあるのか、その理由を解明する必要がある」という指摘があった。

(1) については、日本と韓国、中国の「ウチ」と「ソト」は、それぞれ内容が若干相互に異なるのではないかと感じている。(2) については、たとえば中国人が社会的であると言われるが、それに対する説得力のある説明だと思う。しかし中国の他人同士の「溝」を埋める、すなわち「氷」を溶かすのは容易ではないので、その場で真の信頼関係を確立することは

きず、表面的にならざるを得ないだろう。(3)については、筆者は、メリットとして捉えたことがなかったので、なるほどと思った次第である。理由として歴史的背景を挙げたが、これ以外の理由があるのかもしれない。また何事もエスノセントリズムに陥らないで見られれば一番よいのだが、完全にそうすることは難しい。

注

- 1) 韓国の情の濃厚さについては、李 (1995) pp. 179-222 参照。
- 2) 内訳は、男 21 名、女 12 名、合計 33 名、年齢は 24-54 歳である。
- 3) 韓国統計庁 2001 年の統計で、中学卒業者に対する大学進学率は、男子 72.3%、女子 67.3%。ただし韓国の各種統計は、約 50% から 80% 強まで一定しない。
- 4) 「理」の世界は、「情け無用」の厳しい世界、「気」の世界は「情け深い」おおらかな世界である。韓国での「理」と「気」については、小倉 (1998) が詳しい。
- 5) 最近の韓国の一人あたりの国民所得は、2001 年：US\$10,580、2002 年：US\$11,280、2003 年：US\$12,030 である。ちなみに日本は、2001 年：US\$35,780、2002 年：US\$33,660、2003 年：US\$34,180 である。出所：矢野恒太記念会 (2005) 『世界国勢図会』。
- 6) 元々は農繁期における労働の貸し借りをいう (古田、1995、pp. 120-129)。農業以外においてもこれを種々の場合に応用できる。しかし都会では徐々に薄れているらしい。
- 7) 朝鮮半島では、有史以来 931 回の外寇があった (金、1984、p. 17)。
- 8) たとえば李王朝末期に明成皇后すなわち閔妃 (1851-1895) および閔一族と閔姫の夫の父君である大院君は政敵となり、権力闘争を広げた (角田、1988)。
- 9) 内訳は、男 14 名、女 9 名、合計 23 名、年齢は 23-52 歳である。
- 10) 「面子」については、園田 (2001) pp. 35-85 が詳しい。

主要参考文献

- 愛知大学 (編) (1987) 『中日大辞典 [増訂第二版]』大修館書店。
- 石井敏・久米昭元・遠山淳 (2001) 『異文化コミュニケーションの理論』有斐閣。
- 井上忠司 (1977) 『「世間体」の構造—社会心理史への試み』日本放送出版協会。
- 岩田龍子 (1980) 『日本的センスの経営学』東洋経済新報社。
- 黄 文雄 (1994) 『醜い中国人：日中比較編』光文社。
- 汪 洋 (2002) 『日本人と中国人』彩流社。
- 大阪外語大学 (編) (1985) 『朝鮮語大辞典』角川書店。
- 岡田英弘 (1997) 『妻も敵なり』クレスト社。
- 小倉紀蔵 (1998) 『韓国は一個の哲学である』講談社 (現代新書)。
- 金山宣夫 (1979) 『比較生活文化事典 (2)：中国・ホンコン』大修館書店。
- 金 容雲 (1984) 『韓国の汎パラダイム』サイマル出版会。
- グディカント、W.B. (1993) ICC 研究会訳『異文化に橋を架ける』聖文社。
- 園田茂人 (2001) 『中国人の心理と行動』日本放送出版協会。
- 大東文化大学 (編) (1994) 『中国語大辞典』角川書店。

- 田島英二 (2001) 『「中国人」という生き方』 集英社 (集英社新書)。
- 角田房子 (1988) 『閔妃暗殺』 新潮社。
- 遠山 淳 (2001) 「不安・不確実性調整理論」 石井敏・久米昭元・遠山淳編著 『異文化コミュニケーション理論』 有斐閣。
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』 講談社 (現代新書)。
- 野村浩一他 (編) (1991) 『もっと知りたい中国Ⅱ 社会・文化篇』 弘文堂。
- 柏 楊 (1988) 張良澤・宗像隆幸訳 『醜い中国人』 光文社。
- 古田博司 (1995) 『朝鮮民族を読み解く』 筑摩書房 (ちくま新書)。
- 安田吉実・孫洛範 (編) (1989) 『韓日辞典』 民衆書林。
- 米山俊直 (1976) 『日本人の仲間意識』 講談社 (現代新書)。
- 李 圭泰 (1995) 尹淑姫・岡田聡訳 『韓国人の情緒構造』 新潮社。
- 連 根藤 (1989) 『中国人のはらわた』 はまの出版。
- 魯 迅 (1955) 「狂人日記」 竹内好訳 『阿 Q 正伝・狂人日記』 岩波書店 (岩波文庫)。
- 和辻哲郎 (1979) 『風土』 岩波書店。
- Gudykunst, W.B. and Kim, Y. Y. (1984). *Communicating with Strangers: An Approach to Intercultural Communication*, New York: McGraw-Hill.
- Midooka, Kiyoshi. (1990). "Characteristics of Japanese-style communication" *Media, Culture and Society*.

本研究は、2005年度および2006年度東京経済大学研究助成費 (B) で行った研究成果の一部である。